

白糸台地をフィールドミュージアムに

フランス国立工芸院 ギエルム氏 来町
白糸台地の文化的景観保全を考えるワークショップ

平成22年2月、国選定の重要文化的景観「通潤用水と白糸台地の棚田景観」として白糸台地全域が保全範囲に入りました。

これを受けて、今一度、白糸台地の持つ文化財としての価値を検証しようと、11月24日、町教育委員会と熊本大学政策創造研究教育センターが、土木史と景観を専門とするフランス国立工芸院のアンドレ・ギエルム教授を迎え、講演会と地元関係者との意見交換会を開催しました。

講演会を前に、現地視察を行ったギエルム教授。講演のなかで「自然の中に佇む通潤橋。神聖さを感じる円形分水、そして歴史が作り出した彫刻のような白糸台地の棚田。これが残ってきたことを評価したい。生態学や環境学の見地からも貴重な価値がある。」と評価しました。さらに「景観は人類そのものの、営みや人為の総体です。これまで白糸台地で暮らしてきた歴史を考

えることが大切」と説きました。そのうえで「白糸台地全体をフィールドミュージアムと考えるかどうか。通潤橋の石の重さや、何人によって運んだのかなど、人々の生活の汗や痛みが分かるように教えることが大事。ここには大きなポテンシャル（潜在能力）を感じる。」と文化的景観の先進地である山都町の取り組みについて、アドバースしました。

その後行われた意見交換会には、通潤地区土地改良区の本田陽一さん、白糸第一自治振興区の中村俊寛さん、草野昭治さん、教育委員会の西慶喜主事、熊本大学政策創造研究教育センターの田中尚人准教授が加わりました。地域での現状や課題など、それぞれの立場から意見を述べられ、ギエルム教授にフランスの現状や、問題への解決策などを聞いていました。



西慶喜主事



草野昭治さん



中村俊寛さん



本田陽一さん



アンドレ・ギエルム教授

3人の料理人が作った食の新商品試食会

良いまちには良い材料とうまい料理がある。商店街活性化のため、食文化を観光資源にしようとする新しい商品開発を目指した「山都町食の商品開発モデル事業」。9月から3回にわたり、熊本テルサ総支配人の土山憲幸さんのアドバイスを受けながら、新メニューを創作してきた町内の3人の料理人。通潤山荘料理長、吉田不二夫さん。やむらんかん料理長、水洗睦郎さん、そして、本さつまや料理長、岸本竜彦さん。

12月1日に行われた試食会の会場には、研鑽と探求心あふれる3人の料理人が創りだした、山都町が誇るおいしい米や野菜などを存分に活かした新たな料理が並びました。

料理を評価するのは、町内外から集まった食にうるさい(う)30人。全ての料理をしつかり吟味し、その評価をアンケートに記していきます。

このアンケートの結果を受け、3人の料理人は更なる改良を加え、その後、新メニューとして、皆さんのお口に届くことになりました。



厳しい目と舌で料理を評価



この事業を監修した土山憲幸さん。



(左から) 岸本さん、水洗さん、吉田さん。

「がんばらない」けど「あきらめない」～健康づくり講演会～

11月27日、矢部保健福祉センター千寿苑で、健康づくり講演会が開催されました。町内で、うつ病により休職したり、治療している人が増え、ときには自身の命を投げ出してしまう人が増加傾向にあります。この講演会は、命を支えるということ、町ぐるみで取り組んでいこうと開催されました。

オープニングセレモニーの明光保育園太鼓の勇ましい演奏に続いて、「がんばらない」けど「あきらめない」～命を支えるということ～というテーマで講演が始まりました。講師は、長野県の諏訪中央病院名誉院長である鎌田實さん。鎌田さんは、「人間には、悪い波のときと良い波のときがある。心と体はつながっている。運動して汗をかくことが心にも良い」と説きました。さらに、「山都町は、農家が多く野菜をたくさん出荷しているのに、脳卒中の方が多い。若いときから正しい生活習慣にして心も体も健康に保つことが大事」と町の現状を分析しました。音楽などを交えながらのトークで、訪れた約400人の参加者の心を優しく解きほぐしました。

この講演のあと、子ども達の下校時間に合わせ、通学路などの巡回パトロールや危険箇所の監視などを行う、学校安全ボランティア（スクールガード）養成講習会が開かれ、参加者は登下校時に子ども達に進んで声掛けをすることなどの見守りの方法をメモを取りながら熱心に聞き入っていました。



講師の鎌田實さん



人生に寄り添う仕事 ～介護講演会～

11月9日、矢部保健福祉センター千寿苑で、「山都町高齢者へのより良い介護のために～笑い幸せあふれる介護を目指して～」と題して講演会が行われました。講演会には、介護保険・福祉関係事業所で働く方など約320人が参加。講師は、有限会社「笑う介護士」の代表取締役で、介護事業所の開設・運営支援・指導を行いながら、全国で講演活動をされている袖山卓也さん。

講演で袖山さんは、「介護とは、人生そのものに寄り添うこと、自分が介護している方に一人の人間としてかわっているかどうかが入り口であり、またゴールでもある。」「3年間寝たきりで「死んだように生きている」と語る高齢者のトイレ介助をした際、自分が周囲と違って行ったことは、その方の気持ちになり下半身へタオルをかけてあげる、ほんのわずかなこと。それだけのことだが、「私を人間として扱ってくれた。恥ずかしいという気持ちを思い出させてくれた。」と言われた。」と自身の経験を語られました。

また、袖山さんは、「きつい、汚い、給料が安いなどと、自分で選んだ介護職を嘆いて、形式的な介護をし、その人の気持ちに寄り添わない介護をするのは、その人を人間として扱っていない。介護してやっているではなく、介護させてくれてありがとうと思うべき。人の人生に寄り添える、こんな素晴らしい仕事はない。」と介護という仕事への思いも語りました。

最後に「たかが介護士、されど介護士。自分にしかやれないことがある。できる、できないではなく、やるか、やらないか」と会場に詰めかけた介護に携わる方々へ力強いエールを送りました。



講師の袖山卓也さん

